(16) ヨハネによる福音書第十三章十四、十五、十六節。
(17) マルコによる福音書第十二章二九、三〇、三一節。



セッションII

# 仏典から見た
# アジア共同体構想と宗教統一

**Saeug Chandrangarm（セーン・チャンガーム）**

一九二七年生まれ。十八年間僧侶生活をおくり、後ロンドン大学、ミシガン大学で学ぶ。現在チェンマイ大学助教授、専攻、仏教哲学。
主な著書『The Buddhism of Thailand』『Life, Death and the Deathless in Theravada Buddhism』他。



# 一　全人類の平等を信ずる仏教

仏教は人類の一致を信じている。仏教の創世記と称されることもあるアッガンナスッタ経典（Aggannasutta）によれば、人類の祖先は初め、精神からなる光輝く存在として宇宙空間に住んでいたという。水の表に陸が形造られると、これらの光輝く存在は降臨し、原始の地球を味わい楽しみ、そして、彼らは固体となってその輝きと飛ぶ能力を失ったという。彼らは地上に住まねばならなくなり、前よりも粗末な食べ物を食べてますます身体が固くなり、そして、性別その他の身体的特徴で差別されるようになった。あらゆる人種の人類は、これらの共通の先祖から出た子孫だという。

仏教は全人類の平等を信ずる。ゆえに、インドのカースト制度は認めない。バラモンたちは、自分たちがブラフマ神ご自身の口より出た神聖な出自であると公言しているが、しかし、創造の神、仏陀は彼らについて、一つの簡単な事実をもって次のように教えている。

> しかし、アッサラヤナよ、誰でも知っているように、バラモンから生まれたバラモンの妻たちにも月のものがあるし、子を生みもするし、乳を吸わせもするではないか。それなのに、これらのバラモンたちは、他の何処の女たちと同じく生まれながらも、「バラモンのみが、ブラフマ神から相続できる最高の位を形成する」などと言っているのだ。

仏陀はあらゆるカーストや位による差別を、人為的な不当な差別として除去した。仏陀が認めた唯一の差別は、各個人の因縁あるいは自由意志行動の結果としての人生の道徳的質の差別のみであった。仏陀は言う。

賤しき民は生まれによるのではなく、
バラモンも生まれによるのではない。
行いによって賤民になり得るのであり、
行いによってバラモンにもなり得るのである。

あるときに、ブハラドヴァジャという名前のバラモンが、コーサラ王国のスンダリカ川岸で火の犠牲を供えていた。それを終わって、たまたまそこを通る人に与えるために、彼は供え物の残りを集めていた。すると彼は、仏陀の君が木の根元に座っているのを見て、そこに近づき、仏陀の出自を尋ねた。仏陀は答えた。

生まれを問わず、行いのあり方を問え。
どの枝からでも、まことに火は生ずるもの。
賢い識者は、その出自は低くとも、
見識ある高貴なる位に上げられるもの。
気高きによりて、すべての邪なる轡を辱しめよ。





救いの知恵の師によりて、真理で育まれよ。
真なる育みを完うし、善き人生を生きよ。
汝の供え物は持ち去られん。汝は救いの師のために確と祈るべし。
価値あるは、折に触れ祭祇を行い、救いの師を祭ること。

## 二　政治国家理想

またアッガンナスッタ経典によると、人の数が増え、地に稲作が定着したときに、原始時代が始まったという。人々は集まって、こう言った。

さてそれでは、稲田を分けて、そこに境を印すことにしよう。そうして彼らは稲田を分け、そこに境界線を引いた。

彼らの間でこうして稲田は分けられたが、彼らの中には、他人の場所までも盗んで利用する強欲な者がいた。こういう犯罪人は何回か捕まえられ罰せられたが、それでも彼らは罪を犯した。

さて、バセットゥハよ、それらの者たちはともに集まって、これらの事柄を語って嘆き悲しんだ。

我らの邪なる行いは盗みや偽証に至り、もはや明々白々、その罰は知られている。我らがある者を選び、その者の裁きが正しいならば、それをだれが怒ることができようか。正しく裁かれるならば、だれもそれを怒らない。そうして追放されるに値する者こそ追放されるべきである。我らはその見返りに、その裁き司に一定量の米を献じよう。

こうして彼らは、頭が良くて、最も人気があって、最も魅力があって、最も有能な者を選んで、「マハ・サンマタ」（選尊―大いなる選ばれし者）と呼ぶ司の地位につけた。このようにして、政治国家の原始形態としての組織社会の概念ができあがったのである。

政治国家は必要から人為的につくられたものにすぎないので、仏陀はそれにはほとんど注意を払っていない。その代わりに彼は、支配者の道徳的質と能力については、大きな力点をおいている。

仏陀ご自身も、サキャ王国のサキャ王族の一人であったが、しかし彼は自らを故国や、その他の一国に制限することはしなかった。彼はマガドゥハ国で悟りを開き、カシの国で最初の説法を行い、マガドゥハ国の都ラジャグリハで教団（サンガ）を創設し、生涯の良き日々をコーサラの国で過ごし、そして、マーラスの国で他界した。彼は実に国際的な精神で、人種や政治による壁を超えてすべての人種を教導したのである。彼の模範的な行動から、仏教は国際共同体の概念を促進するものであると結論づけることができる。

## 三　理想国家の概念





世界の主要宗教のすべてが、メシヤ信仰、つまり救世主が到来し、平和と繁栄の黄金時代が来るという信仰を有している。ヒンドゥー教徒たちはカルキ（Kalki）神の到来を待望し、ユダヤ人たちはメシヤを待ち続け、キリスト教徒たちはキリストの再臨を待ち、イスラム教徒の一部はメヘディ（Mehdi）の到来を待望し、そして、仏教徒たちはマイトレーヤ（Maitreya）の名で到来する第五の仏陀を待望している。仏教徒が将来到来するとする黄金時代については、次のように言っている。

同胞よ、そのときには人の齢は八万年となり、乙女たちは五百歳で嫁ぐことができる。そのように人々には、食欲と非同化、老化のたった三種の患いしかない。そういう人々の中でインドは富み栄え、村々や町々と王の都とは、雄鶏が次から次へと飛んでいけるほどにとても近くなるであろう。……

同胞よ、その時代になると、メッテイヤ（Metteyya）、アラハント（Arahant―完き悟りの君）と称される、知恵と善と幸いに満ちた尊きお方が世界に出現し、私がまさに今そうであるように、世々の知識をもって、導きを願う生ける者たちを導く導師として、神々と人々についての教師として他に比類なきお方、導き仏陀が到来するであろう。

マラヤストラ経典（Malayasutra）には、仏教千年王国について、もう少し詳しい内容が記されている。それによると、地の表面は太鼓の皮の面のように平らになるという。つまり、人々の間には完全な平等が実現されるという意味である。そこでは、各々の共同体の中心には、あらゆる願いの樹があって、そこから人々

は何でも必要なものを得ることができるようになるという。これは、社会が繁栄し、自給自足できるようになるということである。

## 四　理想社会の六つの特徴

仏教の経典を見ると、一連の六つの徳分が五カ所に現れている。それらは何の脈絡もなしで、そのままの言葉で記されているのだが、それらの意味するところは、シリマンガラカリャ尊師（Ven. Sirimangalacarya）によるマンガラットゥハディペニ（Mangalatthadipeni）書の中に概要されている。このマンガラットゥハディペニなる書は、仏陀により与えられた三十八の祝福が記されたマンガラスッタ（Mangalasutta）経典の解説書である。その中の第四の祝福は、住むにふさわしい国（パティルパデサー patirupadesa）に生きることについて扱ったもので、この住むにふさわしい国とは、マンガラットゥハディペニ解説書によれば、次の六つの徳分を備えた国であるという。

① 見徳（dassananuttariya）
② 聞徳（savananuttariya）
③ 益徳（Labhanuttariya）
④ 育徳（Sikkhanuttariya）





⑤ 仕徳（pacariyanuttariya）
⑥ 孝徳（Anussatanuttariya）

経典はこれら六つの徳分を宗教的目標、もちろん仏教の目標として解釈してきた。見徳とは例えば、仏陀の見識であり、ダルマ（真理）による見方であり、またサンガ（教団）の見解である。もしもこの見徳が仏陀だけにしかできないものであると限定するならば、仏陀の君が他界した後は、適住の国となり得る社会は一つだにあり得ないことになってしまう。従って、これらの六つの徳分は、世俗的意義においても解釈され得ると私は確信している。

世俗的観点からこれらの六つの徳分を見ると、次のようになるであろう。

① 見徳とは、目で見えるすべてのものであり、つまり社会に存在するあらゆるものは、目で見て楽しく、美徳と創造性を鼓舞するものでなければならない。
② 聞徳とは、耳で聞こえるすべての音であり、それらは聞いて楽しく、為になり、美徳と創造性を鼓舞するものでなければならない。
③ 益徳とはすなわち、すべての民にふさわしい職業が与えられ、民自らとその家族のために十分な収入が与えられなければならないという意味である。
④ 育徳、すなわち徳による教育は、国のすべての民のために備えられなければならない。

⑤ 仕徳とは、交通、通信、厚生、娯楽等の奉仕事業はすべての民に利用できるようにされなければならないということである。

⑥ 孝徳とはすなわち、政治、経済、文化、および宗教についての共通の人生哲学を意味する。そういう人生哲学が討論され、同意され、そしてすべての民に子供のころから教え込まれなければならない。

## 五　アジア共同体の概念

出生において人間は共通の先祖を持ち、平等であるという考え方は、仏教だけの独特のものではない。すべての主要宗教は同じ考えを持ち、よってそれは、あらゆる文化にとって普遍的、根本的概念と見ることができる。この普遍的な概念を基礎として用いることで、アジア共同体の構想を企画し、実現することができる。

私の見解では、四つの支配的文化圏から鑑みて、アジアは四つの区域に分けることができる。

パキスタンからトルコまでの西アジアは、イスラム文化が支配的であることから、イスラム圏として分類できる。そうすると、イスラエル国家が異議を訴えるかも知れないが、その呼称と構成について協議した上で同意を得ることもできよう。インド、バングラディッシュ、ヒマラヤ諸国、スリランカ、ビルマ、タイ、ラオス、カンボジアを含む中央アジアの諸国は、ヒンドゥー・仏教圏として分類することができる。





マレーシア、インドネシア、フィリピン、ブルネイ、ニューギニアは別のグループとして分類される。この地域の人々の大多数は同じ種族に属している。彼らの多くはイスラム教徒であるが、先出のイスラム圏とは大きな隔たりがあるので、イスラム圏に彼らを加えることはできない。この地域の呼称については、今後の討議と決定を待たねばならない。中華人民共和国、北朝鮮、および韓国、日本、ベトナムは、仏教・儒教圏、あるいは地理的にいえば、東アジア圏として分類され得る。

まず、それらの各々の区域が、連合体、共和体、あるいは連邦等の形で統一されなければならない。中に属する各州国家は、まず経済分野で協力するべきである。このことが勧められる理由は、ＥＥＣやＡＳＥＡＮといった経済指向のグループが、極めて効果的に機能しているからである。

次に、協力と統合をなすべき分野は、軍事防衛と外務の分野でなければならない。所属州国家は各々の軍事資源を確保し、共通の軍事体制を持つべきであり、これがまた、所属州国家を膨大な軍事支出や州国家内紛争から解放することにもなる。共同の防衛軍が首尾よく構築されれば、共同の議会や外交政策も容易に発動できる。

もしもこの統合過程が一区域において暫時順調に作動するならば、隣接する二区域はより大きな連合体や連邦へと合流するようになるであろう。このようにして、アジア全体が単一の共同体になっていくであろう。

## 六　統一への道を妨げる分野

私が予想できる限りにおいては、統一への道を妨げる微妙な問題を抱えた分野が、少なくとも四つある。それらは、地域言語、地域宗教、地域社会制度、および地域文化の分野である。

地域言語については、放置しておけばよい。各所属州国家は国内の事柄を従来通りにその土地の言葉で処理すればよいのであるが、その一方で、共通言語が州国家間交流や共同作業のための媒介として必要である。この目的のために、どの言語が採用されるべきであろうか。人が自らの話す言語に寄せる誇りというものは根の深いものであるから、ある特定の州国家の言語を仲介語として採用するのは容易ではないであろう。そして、今日では英語が公用性の頂点に定着しているようであるので、少なくとも現時点では、州国家間媒介言語として英語を使用するのが賢明といえよう。

また、王制等のような地域社会制度についても放置しておくべきである。地域文化や地域社会の生活様式一般というものは、変化や同化の過程に対して頑固に抵抗する傾向があり、それは、インドや中国のような古代からの大きな国の文化において特に強い。州国家の文化的特色もまた放置されるべきである。全世界的交流が進み、科学技術に基づく現代的生活様式が広く伝播している結果として、もう既に世界が統一文化に向かう趨勢が出てきているようである。それはよい兆候といえる。

## 七　最も微妙な分野としての宗教

### (1) 世界的単一宗教の創設





宗教は通常、社会の核心、文化の核心、および文明の基台として崇拝されている。ある宗教が他の宗教の中に同化したり、あるいは平和裡によせ暴力的にせよ、何らかの方法である社会から放棄されるというのは最も難しいことである。例えば、ヒンドゥー教は、仏教の目覚ましい伝播とその人気の中を生きのび、また、イスラム教徒の力づくの侵入という厳しい波もくぐりぬけ、西欧列強を背景とするキリスト教の改宗努力の中を生き残り、そして最近では、インドの貧民大衆にとっては非常に魅力的な共産主義の到来の中をも生きのびてきた。従って、地域の諸宗教を統一し、一統合体または一国家の共通宗教にするということは不可能なのである。

それでもしかし、一共同体としては、無数の破壊や苦痛を人類に与える原因となってきた宗教的偏見や闘争、および全面戦争を縮小または解消するために、人生についての精神的指導理念としての単一宗教を持つことが望ましい。そこで問題は、そのような単一宗教をどのようにして持つことができるかということになる。

デリー大学のケダル・ナト・ティワリ博士（Dr. Kedar Nath Tiwari）は、単一普遍宗教の創設のための三つの方法を指摘している。

① 既存の一宗教を普遍宗教の地位にまで引き上げる。
② すべての既存の宗教からよき教理内容を抜粋し、それらを組み合わせて一つの宗教に作りあげる。
③ 全く新しい一宗教を創造する。

しかし、この著者は、以上の三つの中のどの方法についても、その成功には非常に悲観的である。世界宗教の歴史を研究してみて、私はただ一点を除いて、他については彼に同意する。

私は、一世界宗教が科学的に、かつ体系的に系統化され創設され得ると考えている。そういった科学的宗教の出現の道を備えるためには、宗教の性質というものを科学的に研究する必要がある。われわれがそれを真剣にかつ客観的に行えば、われわれは、宗教というものは純粋に人間の事象であることを発見するだろう。かつて宗教は、人間の要求を満たすためにつくられてきた。私は次のようなマイクレム（N. Micklem）の言葉に同意する。

しかし現にそうであるように、われわれは一人一人の内において、犯罪者としての何かを望むと同様に、英雄としての何かを望み、多くのエゴイズムと同時に、愛ある何かを望む。だから、すべての者の中に神秘的な一面があり、合理主義的な一面があり、献身的な一面があり、神を畏れる一面がある。このようにすべての人間は、一つの共通な人間的性質を共有しており、同情心や想像力や自覚によって、われわれはお互いに理解することができる。諸宗教は、その割合と力点のおき方が違うだけであり、どれも皆、一つの共通の性質の上に立脚しているといえる。

## （2）人間存在の基本的要求

人間存在には、次の基本的な要求があることは一般的に認められている。





① 肉体的要求―生命を維持するための多くの必要物質の要求。
② 社会的要求―自らが所属する社会、文化の中に存在し、それらから認められるための要求。
③ 情緒的要求―愛、配慮、注意、性的悦楽、音楽、詩歌、芸術等のような情緒的満足の要求。
④ 緊急、および危険の際の超現実的逃避の要求。
⑤ 人間、事物、および環境における善の要求。
⑥ 知的要求―真理、知識、および情報に対する要求。
⑦ 生命体にとっては非常に重要な生命の存続に対する要求。
⑧ より高い幸福に対する要求。
⑨ 人生の現状のアンチテーゼである人生の完全性に対する要求。
⑩ 人生の指針としての役割を果たすべき健全な人生哲学に対する要求。

普遍的宗教は、その信徒に対して、これら十項目の要求のすべてを充足するための教理、組織、活動、および資質を備えていなければならない。現存の主要な世界宗教は、その中の一部の要求にこたえるに止まっている。ほとんどの宗教は例えば、人間の肉体的要求にはほとんど関与しようとしない。仏教は、情緒的満足を犠牲にして、より崇高な幸福を得ることを強調しており、またほとんどの有神論的宗教は、知的な要求よりも、超現実的な逃避の方に価値をおいている。儒教は善を強調するが、その他のより高い要求は無視する。

この十の要求をすべて充足できる宗教は、完全な宗教といえる。すべての世界宗教が初期の段階ではそうであったように、この宗教はまず少数派の宗教として社会に投じられ、そしてそこからそれ自らの完全性の力と吸引力で周囲に広がっていくのである。同じ地域にある既存の宗教は、放置しておいても、徐々にかつ静かに衰退していくか、あるいは、存続しようとすれば徹底的にそれを受け入れるかのいずれかになるであろう。

## 八　結論

アジア共同体の概念は、実行可能であるのみならず、そう遠くない将来に実現され得るであろう。異なった人種、言語、宗教、および文化の人々が、もしも同等の地位、権利、そしてもちろん、進歩のためのよりよき機会を与えられるならば、一つの共同体の中で調和して生きるということは、極めて可能なことなのである。

異なった宗教を統一するということは、何よりもはるかに難しいことではあるが、そして、より長い時間とより大きな努力が必要ではあるとしても、その可能性が全くないわけではない。少なくともそれは挑戦的であり、試みる価値のあることである。



セッションⅢ

# 儒教の経典から見た アジア共同体構想と宗教統一